

墨書1(仁王門) 墨書2(仁王尊像)



ふるさと検定 八幡塾《探訪考証編》

# 郷土の伝統・文化を学ぶ 法海寺大百科(第3回)

法海寺は八幡の全住民によって  
お守りしています

法海寺の歴史を語るうえで欠かせないのが「薬王山法海寺儀軌」ではあるが、当寺の創建が天智天皇の七(六六八)年と著述されているものの、この儀軌が著作されたのは創建から七十六年後の文安元(一四四四)年であることから、記述内容の信憑性に疑問を抱いても不思議ではない。

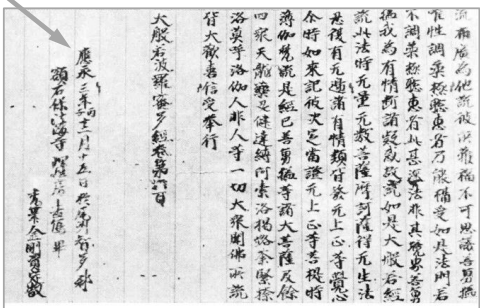
昭和四八年の秋、境内に知多市福祉会館を建設するにあたり発掘調査をしたところ、弥生文化といわれる約二千年前の集落が立地していたことが判明、平成三年の秋には、本堂再建に先立ち直下の発掘調査よつて

弥生時代の人骨三体が確認された(下の写真右)。同時に白鳳・奈良・平安時代前葉(七世紀後半)十世紀前半)の古瓦も多数出土したことから儀軌の創建年代が裏付けられた。

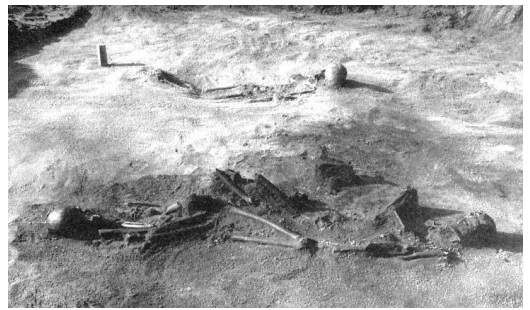
法海寺の寺名が記録に初めて登場するのは、應永三(一三九六)年まで待たなければならぬ。佐布里の雨宝山如意寺が所蔵する大般若経第六百卷の奥書に「於尾州智多郡額石保法海寺理性房書写畢秃筆金剛資定叡」と記されている(下の写真左)。保というのは民家の集まった一区域をさしており、額石保という地名がのちの寺本四カ村の全域をさしているのか、法海寺付近の一区画のみをさしているのかは定かでない。

平成二二年に三四四年ぶりの全面解体修復した仁王門・仁王尊像から、制作年代寛文六(一六六六)年を裏付ける墨書が発見され(写真上)、法海寺の歴史を検証する新たな一頁が付け加えられた。

大般若経第六百卷奥書



人骨出土状態



## 安全なまちづくり県民運動(8/1)

環境・安全部会では「夏の安全なまちづくり県民運動」の期間中に、知多警察署、知多市役所の協力を得て、安心・安全なまちづくりの啓蒙活動を行いました。

